

ハイキング初級 岡山県の名城全制覇 2日間の旅

6月7日(金)

名古屋(7:26発)＜新幹線「ひかり」＞-岡山(9:13着)-岡山城(9:50~11:30 川面に映える漆黒の城)-昼食(11:45~12:30)-備中高松城(13:10~14:15 羽柴秀吉の水攻めで有名)-津山城(15:30~17:00 重畳と連なる高石垣の城)-高梁国際ホテル(18:10着泊)

6月8日(土)

高梁ホテル(8:30発)-備中松山城(9:20~11:00 ガイド同行/マイクロバスで移動/ハイキング入門 標高差約40m、歩行時間約90分)-

昼食(12:00~12:50)-鬼ノ城(13:30~16:00 ガイド同行/マイクロバスで移動/ミニハイキング 標高差約50m、歩行時間約90分/謎の多い古代山城)-岡山(18:58発)＜新幹線「ひかり」＞-名古屋(20:34着)

3分でわかる 岡山城の基礎知識

今の岡山城付近には旭川の流域に岡山、石山、天神山という3つの丘がありました。その石山にあった城を手に入れて本拠地とし、岡山の地を戦国の表舞台に立たせたのは宇喜多直家でした。その子の秀家は、岡山の丘に本丸を定め、今に残る岡山城を築きました(1597年天守完成という)。江戸時代の文献によると、築城は豊臣秀吉の指導によるものといわれます。さらに、多岐にわたる旭川の河道を利用して、流れを現在のように城の北や東を守るように整えたり、堀づくりに活用し、堀の間に南北に長い城下町をつくりあげました。こうして今に続く中心市街地の原型ができ、岡山の名が、市名、県名となる礎となりました。その後城主となった小早川秀秋、池田氏により城と城下町は、さらに拡張され今に至ります。

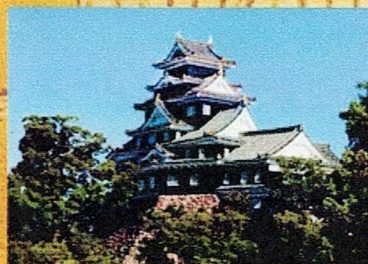


焼失前の天守

岡山城の天守は、織田信長の安土城や豊臣秀吉の大坂城がそうであったといわれるように、外壁は黒塗りの下見板で覆われていて、烏城の別名があります。また、発掘によると、宇喜多秀家時代の金箔瓦が出土しており、築城時には、城内の主要な建物の随所に金箔瓦が用いられ、豊臣政権下の有力大名である威厳を示していたことでしょう。これにより金烏城とも呼ばれます。

さらに、天守の石垣や1階の平面が不等辺五角形をしているのも特徴の1つで、土台になった岡山の丘の地盤にあわせていたといわれています。さらに、西側には付櫓として塩蔵が付属し、天守への入口がありました。

天守は明治維新後も残る貴重な存在で、昭和初期には詳細な図面が残されましたが、戦災で焼失しました。しかし、昭和41年(1966)には、往事の姿を偲ばせる天守が再建されました。



再建後の天守

1 岡山城 (昭和の再建・平成の

改修・2022年11月3日令和の大改修)

創築者 戦国岡山を制した梟雄

宇喜多 直家 1529~1582 (1581説有)

今の岡山の地に進出した戦国武将。岡山城の前身となる石山の城を築いた。

初代城主 宇喜多秀家 1572~1655

父直家の代から岡山を治めた戦国大名。石山の城の隣の丘「岡山」に天守を持つ新たな城を築き、城下町づくりを行った。天下を統一した豊臣秀吉の時代に有力大名となる。日本史上最も有名な戦である「関ヶ原合戦」では、西軍の主力となって戦ったが、破れ、その後、八丈島に流刑となり、同地で約50年暮らした。

2代城主 小早川秀秋 1582~1602

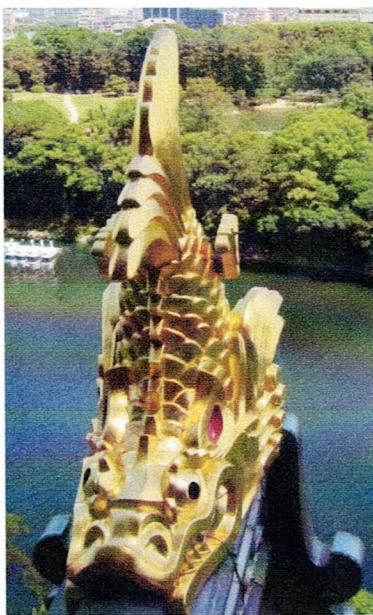
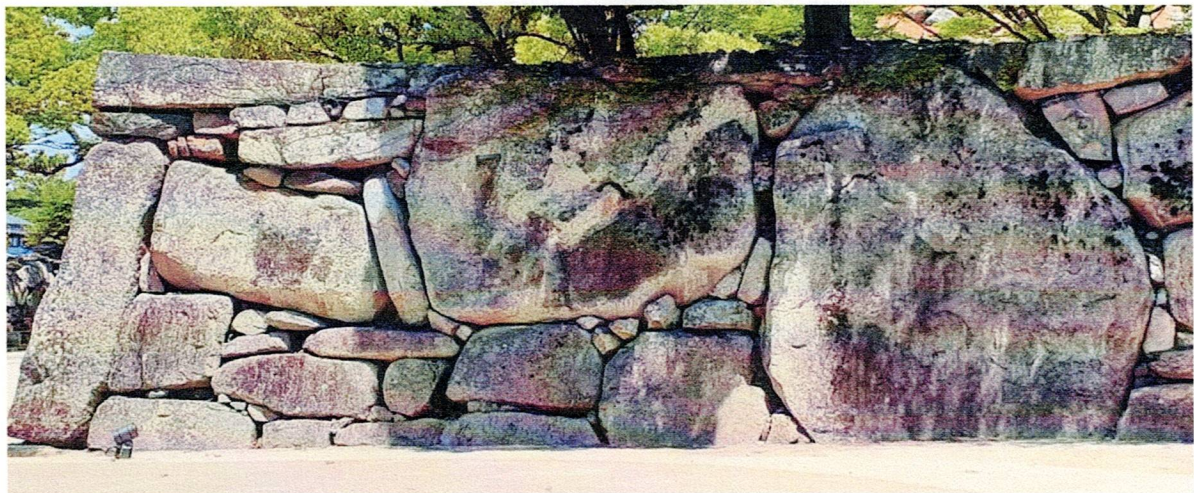
豊臣秀吉の甥として生まれ、「関ヶ原合戦」では、勝敗の重要な鍵を握った。「関ヶ原合戦」後、岡山城に入場し、改築に取り組んだが、岡山に来て2年足らずで、21歳の若さで没した。

5代城主 池田 光政 1609~1682

自ら先頭に立って政治改革を行い、政治や教育、災害対策など現代につながる岡山の基礎を築いた。江戸時代初期の名君として知られる

6代城主 池田 綱政 1638～1714

新田開発や治水事業に取り組む。文化にも明るく、岡山城に隣接する日本三名園の一つ「岡山後楽園」を造営した。



<写真1 別名 黒い壁塗り鳥城 写真2 不等辺五角形の城 写真3 大きな鑑石
写真4 金の鯨 向こうには岡山後楽園 写真5 不明門（あかずのもん）>

高松城水攻めビフォー

「天下布武」の旗印を掲げて全国制覇を進めていた織田信長は、天正5年(1577)から中国地方の担当武將に羽柴秀吉を当てた。その秀吉に立ちはだかったのが、西国の雄・毛利氏である。秀吉は毛利方だった宇喜多家を味方に付け、天正8年に播磨の三木城、天正9年に因幡の鳥取城を兵糧攻めにして落城させた。

以下は パンフレットから引用

天正10年に秀吉は山陽を西進し、宇喜多家軍勢も率いて備中高松城を最前線に毛利軍と対峙した。これら中国地方の攻略は「秀吉の中国攻め」と呼ばれ、三木城と鳥取城の兵糧攻め、備中高松城での水攻めは壮絶な戦となり、中国攻めの三大攻防戦となった。

用

高松城は浮城に

秀吉軍の「水攻め」により、備中高松城は湖面の浮城となった。「水攻め」の戦法による戦いは世界で5箇所。海外は中国とオランダの2箇所、国内は3箇所。その中で成功した「水攻め」は、備中高松城のみである。この「水攻め」を考えたのは、軍師・黒田官兵衛といわれている。

『太閤記』『中国兵乱記』などの伝記に書かれている堤防の長さは蛙ヶ鼻から約2.7km、規模は高さが約7m、幅の底部が約24m、上部が約10m。工事期間は12日で、周辺の百姓にお金や米と引き換えに土を運ばせたというものであった。

成功の要因は、自然の地形に恵まれていたことと雨期で大雨が降ったことが挙げられる。1985年6月の洪水のとき、左上写真のように高松城跡の周辺は水に浸かったことがある。このことからわかるように、この地域は大規模な築堤をしなくても、水が溜まる地形なのである。

岡山市教育委員会による蛙ヶ鼻付近の発掘調査でも、幅24mにわたる築堤の基部で、杭の列や土依積みの痕跡が確認されている。

※備中高松城の水攻めについては様々な説があり、不明な点もたくさんあります。(水攻めの図は想像図)



高松城水攻めアフター

天正10年6月4日、秀吉は清水宗治が湖上で切腹するのを見届けた。5日、和陸の儀式と兵糧の徴収を終えると、毛利軍の追撃があっても妨害できるように堤防を決壊させ、6日の早朝には撤退を開始した。

信長の「吊い合戦」を大義にかかげて明智光秀討伐のため、京都までの道のりを急いだ。秀吉は疾風怒涛の大返しで、織田信長を討った光秀と山崎で対峙する。この電撃的な反転を「中国大返し」という。

めすることができなかった。そこで黒田官兵衛の進言と言われる「水攻め」にとりかかった。約2・

播磨の三木城と因幡の鳥取城の陥落によって、織田軍と毛利軍の最前線は備前と備中の国境に前進した。毛利側の防衛ライン上にあった「七城」を秀吉軍は次々に落としていったが、本城の高松城だけは攻めあぐねた。

天正10年(1582)5月、秀吉率いる軍勢三万は高松城を取り囲み、宇喜多軍なども攻め込むが、力攻

7キロの堤防を築き、足守川の水を引き入れ、高松城を湖の湖城にしたのである。

毛利勢が手を出せないままにいる中、6月2日に本能寺の変で、織田信長が家臣明智光秀の謀反により殺害された。3日、毛利方に向かう光秀の密使を捕まえて信長の死を知った秀吉は、そのことを隠して高松城・清水宗治の切腹を主張して講和を結ぶように説いた。6月4日、清水宗治は湖上に船を浮かべて自刃し、織田方と毛利方の和睦が成立した。



写真1 高松城主清水宗治の辞世の句

浮世をば 今こそ渡れ 武士(もののふ)
の 名を高松の 苔に残して

秀吉の水攻め攻勢と説得により、家臣達の無事と引き換えに自らの自刃を決意した宗治。秀吉や黒田官兵衛の他、大勢の武者馬達が見守る中、小舟で漕ぎ出し、舞い、詠んで逝ったとされる一句が刻まれている。その最期の散り様の美しさは天晴れとされている、

写真2 清水宗治の切腹の後、秀吉が家臣につくらせた供養塔

写真3は清水宗治の胴塚

写真4 備中高松城跡(公園) 夏には、花菖蒲や「宗治蓮」が咲く

3 備中 津山城 (別名鶴山城 近世城郭技術の最盛期を代表する平山城)

本能寺の変で織田信長と共に最期を遂げた森蘭丸成利(なりとし)(長定とも)の末弟、忠政が築城した津山城(別名・鶴山城(かくざんじょう))。築城に約13年かけられた城は、五層五階、地下一階の天守と70以上の櫓、それらを取り巻く石垣や堀など、旧美作(みまさか)国国主としての威信を誇るものであった。森氏が一時改易となり津山を去った後は、親藩・越前松平家が入封し明治を迎える。明治6年(1873)の廃城令を受け、翌年から天守その他の建物は全て取り壊され石垣のみが残された。しばらくは放置されていたが、地元有志による「鶴山城趾保存会」による保存運動が始まり明治33年(1900)、津山町営の鶴山公園となり、以来さまざまな整備が進められてきた。昭和38年(1963)、国の重要文化財の指定を受ける。現在、城のシンボルとなっているのは備中櫓。白漆喰を美しく塗込められた姿は、城を取り巻く高石垣と共に絶好の被写体となっている。平成10年(1998)に策定された「史跡津山城跡保存整備計画」の一環として、発掘調査や残された絵図、古写真などを元に復元されたもの。内部は畳敷きの御殿様式で当時は本丸御殿ともつながり、城主とその家族の生活の場として使用されたと推定されている

注 [津山城の歴史観光と見どころ・お城めぐり FAN\(shirofan.com\)](http://shirofan.com) からの引用

森忠政と津山城築城

慶長8(1603)年、美作一国18万6千5百石の国持ち大名となった森忠政は、吉井川と宮川の合流点を見おろす小高い「鶴山」を城地と決定し、翌慶長9(1604)年「鶴山」を「津山」と改めて城と城下町の建設を開始しました。

途中、江戸城や駿府城普請、大坂の陣への出陣などに多くの年月を費やされましたが、足かけ13年を経て元和2(1616)年によりやく築城工事は終了したのです。

津山城の城郭構成

津山城は、吉井川と宮川の合流点を望む小高い山を利用して築かれています。山頂を削って本丸とし、本丸を囲むように二ノ丸・三ノ丸が配置されています。麓には重臣の屋敷を配し、城下町との間を囲する堀で囲んでいます。堀には6ヶ所の門が設けられており、城下町の中心となる京町に面する京橋門を大手としています。

本丸と二の丸には御殿が置かれ、建造物は本丸31・二の丸12・三の丸17棟が配置され、門は本丸15・二の丸7・三の丸11棟の門が存在しました。比較的コンパクトな面積の中に、これらの建造物群がひしめき合っている様は壮観であったと思われます。

津山城の城主

森氏は初代の忠政から4代続きましたが、元禄10(1697)年、4代藩主長成の跡継ぎを立てられずに領地没収となり、翌元禄11年には松平宣富が美作10万石を領し津山城主となりました。その後松平氏は慶應まで9代続き明治維新を迎えたのです。

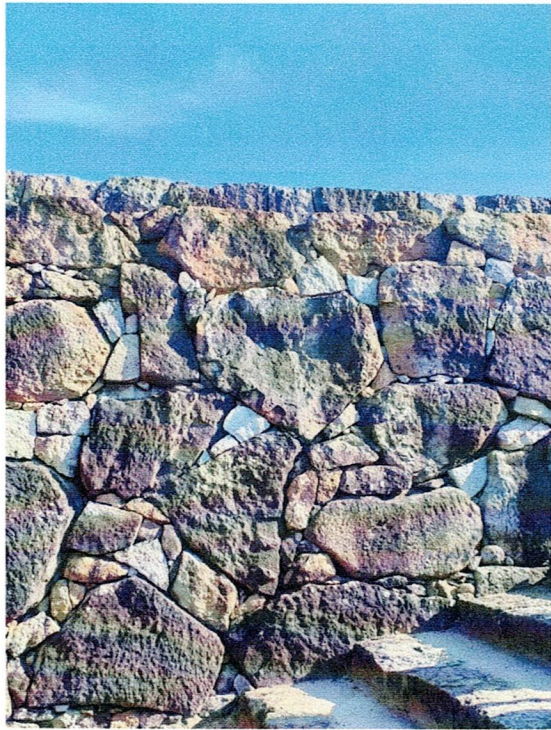
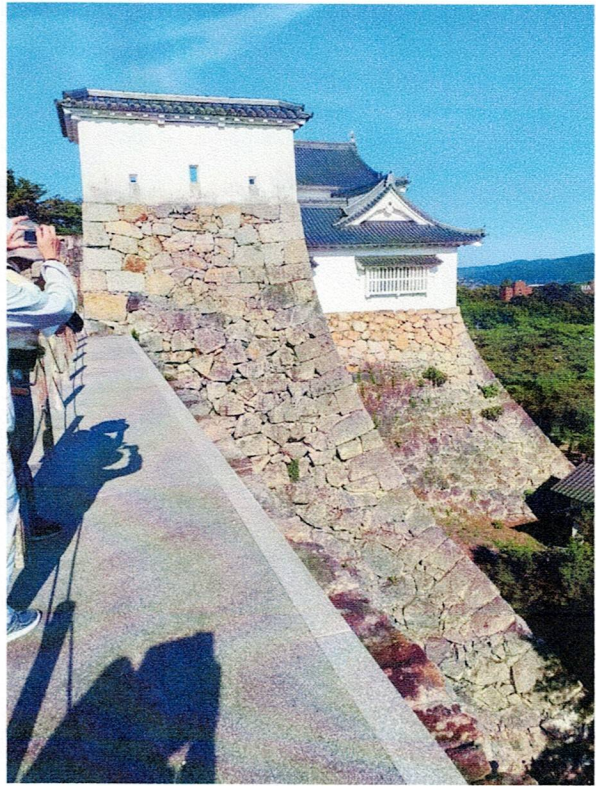
津山城廃城と鶴山公園

江戸時代の終焉と共にその役目を終えた津山城は明治6(1873)年には取り壊しが決まり、明治7年から明治8年にかけて石垣を残して全ての建物が解体され払い下げられました。

その後津山城跡は県有地となり、明治32(1899)年には公園にするという条件で津山町に払い下げられました。翌年から城跡の公園化が進められ、当時の津山町議会議員(後の津山市議会議員)福井純一らの尽力により、昭和3(1928)年頃までには城跡全体が桜で覆われる現在の姿となったといわれています。

歴代藩主一覧

森家	初代	1603～	森 ただまさ 忠政
	第2代	1634～	森 ながつぐ 長継
	第3代	1674～	森 ながたけ 長武
	第4代	1686～1697	森 ながなり 長成
松平家	初代	1698～	松平 のぶとみ 宣富
	第2代	1721～	松平 あさごろう 浅五郎
	第3代	1726～	松平 ながひろ 長熙
	第4代	1735～	松平 ながたか 長孝
	第5代	1762～	松平 やすちか 康哉
	第6代	1794～	松平 やすはる 康义
	第7代	1805～	松平 なりたか 斉孝
	第8代	1831～	松平 なりたみ 斉民
	第9代	1855～1869	松平 よしとみ 慶倫



←ハートの石垣 ↑石垣の反りに感動



←月見櫓



↑初代藩主・森忠政の銅像

備中松山城 歴史年表

年号(西暦)	関係事項
延応2年(1240年)	秋庭三郎重信が大松山に築城する。備中松山城のはじまり。
元弘年間 (1331年~1333年)	大松山に高橋宗康、小松山に弟の大五郎が在城。 地名を「高橋」から「松山」に改める。
永禄4年(1561年)	永禄2年(1559)から成羽鶴首城主の三村家親が毛利氏の加勢で備中松山城を攻め、城主の庄高資を追ひ払う。
永禄9年(1566年)	三村家親が美作国興禅寺にて、備前の宇喜多直家の刺客に襲われ死去(銃による暗殺)。
永禄10年(1567年)	三村元親が父の仇討として、宇喜多直家を攻めるが大敗。 庄高資が宇喜多氏の加勢を得て、一時的に備中松山城を奪還する。
元亀2年(1571年)	三村元親が毛利氏の加勢によって備中松山城を奪回し、備中の中・北部を支配する。
天正2年(1574年)	毛利氏が宇喜多氏と和睦したため、三村元親は毛利氏から離反し、織田家と結ぶ。そのため、毛利・宇喜多両軍の追討を受け、備中松山城に籠城し(備中兵乱)、翌年に元親は自害する。
天正8年(1580年)	毛利輝元、備中松山城普請を指示し入城する。
慶長5年(1600年)	関ヶ原の戦いで西軍総大将であった毛利輝元が敗北し、代わって備中国奉行として小堀正次が備中松山城を預かる。
慶長9年(1604年)	小堀政一(遠州)、父正次の急死により家督を継ぐ。
慶長13年(1608年)	この頃、遠州が備中松山城および御根小屋の修築を行う。
寛永18年(1641年)	小堀家のあと池田家が入城するも跡継ぎができず、そのため水野勝俊が一時城地を預かる。
寛永19年(1642年)	水谷勝隆が備中成羽から5万石で移る。
寛文4年(1664年)	水谷勝宗が父勝隆の死により家督を継ぐ。
天和元年(1680年)	備中松山城と御根小屋の大修築が始まる。(天和3年1683年完成)
元禄6年(1693年)	元禄2年(1692)に勝宗の死により、家督を継いだ水谷勝美が死去。 無嗣断絶となり、翌年、播磨赤穂藩主浅野長矩が一時城地を預かる。 大石内蔵助が城代として備中松山城に1年滞在する。
延享元年(1744年)	安藤氏、石川氏が城主となった後、板倉勝澄が伊勢亀山から5万石で備中松山城へ移る。その後、板倉家の統治が7代続く。
寛政5年(1793年)	御根小屋馬場に八重籬神社を創建する。(1830年に現在地に移転する。)
嘉永2年(1849年)	板倉勝静が、漢学者山田方谷を登用し藩政改革を行う。
慶応4年(1868年)	板倉勝静が15代将軍徳川慶喜の老中首座であることから、備中松山藩は幕府軍として戊辰戦争を戦う。 岡山藩主池田茂政が明治新政府の命により、松山征伐を行う。 備中松山城は無血開城となり、備前岡山藩の支配となる。
明治2年(1869年)	地名を「松山」から「高梁」へ改称する。

備中松山城の歴史

この城の歴史は古く、鎌倉時代の延応二年（一二四〇）に有漢郷（現在の高梁市）有漢町（の地頭に任ぜられた秋庭三郎重信により臥牛山のうちの大松山に砦が築かれたことに始まります。

その後、小松山に移り、城の縄張りも時代とともに変化しますが、なかでも天正二年（一五七四）に起こった「備中兵乱」時は、「砦二十一丸」と呼ばれた出丸が築かれていたことが記録として残っており、臥牛山全域が一大要塞となっていたことがうかがえます。

当時の城主であった三村氏が滅んだ後も、毛利氏の東方進出の拠点として、またさらに毛利氏が防長二国に退いてからも、備中国奉行として赴任していた小堀正次・政一（遠州）父子により修築がなされるなど、備中の要衝としての役割を担っていたようです。以降、池田氏、水谷氏、安藤氏、石川氏、板倉氏と城主が変わり明治維新を迎えますが、現存する天守などは天和三年（一六八三）に水谷勝宗により修築されたものと伝えられています。



◆天守(国指定重要文化財)

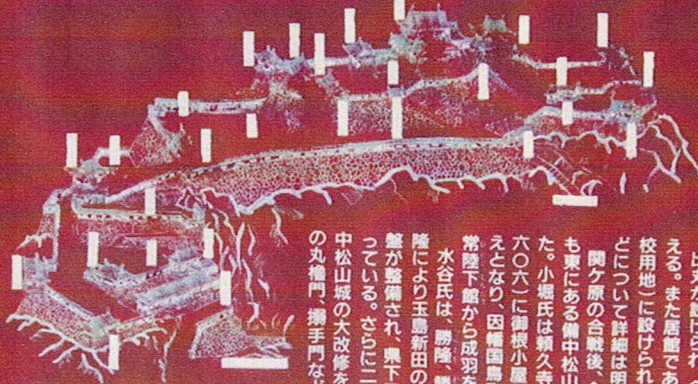
木造本瓦葺き二層二階の建物で、内部一階には囲炉裏と装束の間が、二階には城の守護神を祀った御社壇があります。古い木組みの構造の中に、美しい手斧と槍鉋の跡が見られます。

備中松山城復古図

(近世式)

城主一覧

時代区分	期 間	城 主
鎌倉時代	1240～1330	秋庭氏
室町時代	南北朝 1331～1355	高橋氏
	1355～1362	高氏
	1362～1509	秋庭氏
	戦国 1509～1533	上野氏
	1533～1571	庄氏
安土・桃山時代	1571～1575	三村氏
	1575～1600	(城代) 天野・桂氏
江戸時代	1600～1617	(奉行) 小堀氏
	1617～1641	池田氏
	1641～1642	(定番) 水野氏
	1642～1693	水谷氏
	1694～1695	(定番) 浅野氏
	1695～1711	安藤氏
	1711～1744	石川氏
	1744～1868	板倉氏
明治時代	1868～1869	(定番) 池田氏
	1869～1871	板倉氏
	1873	廃城



備中松山城は、延暦二年(一〇一四)に有漢(現上野郡有漢町)の地頭秋庭三郎重信が臥牛山の太松山に建てたことに始まる。元弘年中(一一三三～一一三六)には、秋庭氏に代わり備後の三好氏の一族である高橋九郎佐門が康が太松山に入城。この頃には備後には小松山まで拡張し、弟の太五郎を備前させている。その後、城の隣接する成羽郡吉田(現吉田郡成羽町)城主三村家親が尼子氏の加勢吉田左京亮を討ち、備中松山城主となつていく。元龜三年(一五七二)、將軍足利義昭の仲介で毛利氏と宇喜多氏の和睦が成立すると、三村元親は東方の備田備長と結び、毛利氏に反旗を翻す。天正二年(一五七四)冬から翌三年夏にかけて毛利・宇喜多連合軍と三村勢との間で備中松山城をはじめとする備中諸城をめぐる備中陣戦が展開される。いわゆる「備中兵乱」で三村氏は敗北が、この頃には備中松山城の本城は小松山へ移り、臥牛山一帯は太松山をはじめ天神丸・佐内丸・本太丸・馬鈴丸などが出城・出丸が設けられ、全山が一大要塞となつていく。この頃、また居館である御帳小堀も現在の場所(臥牛山南西麓、現高松高等学

校用地)に設けられていたようであるが、本城とともにその破壊や焼失などについて詳細は明らかではない。

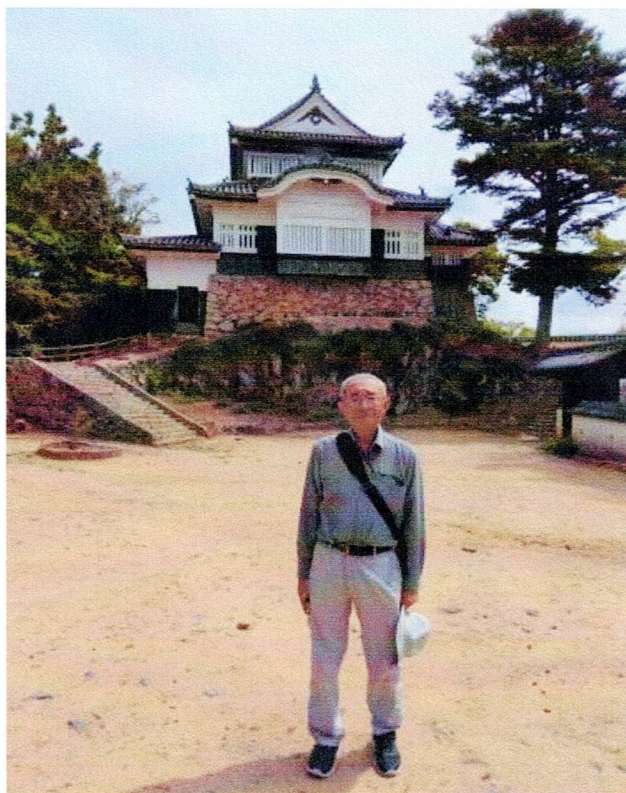
関ヶ原の合戦後、全国の美濃をほぼ掌握した徳川家康は、毛利領の中で最も東にある備中松山城に国奉行として小堀正次・政一(遠州)父子を駐せさせた。小堀氏は頼久寺において政務を執つていたが、政一は、慶長(一六〇六)に御帳小堀と備中松山城の修築を行つていく。その後、政一は所替えとなり、因幡国鳥取から池田長幸が入城。その子長常に継子がなく廃絶、常陸下郡から成羽を経て、寛永(一六四四)年、水谷勝隆が入城する。水谷氏は、勝隆、勝美の三代が備中松山城を治めていく。初代の勝隆により玉島新田の開拓や高瀬川水路の開発など、主に経済基盤を整備され、奥下三太(三太)として有名な、備中松山城にもこの頃に始まつていく。二代の勝美は、天和元年(一六八二)から三年にかけて備中松山城の大改修を行い、現存する天守や「重櫓」その他の櫓、大手門、二の丸櫓門、搦手門など全客が完成している。しかし、三代の勝美が若くして急逝、跡継ぎがなかったため水谷氏は改易となつていく。

元禄六年(一六九三)水谷氏断絶後、播磨赤穂藩主浅野内匠頭長矩が城の受け取りにあたり、城代家老大石内蔵助良雄は一年近く在番として備中松山城にとどまつていく。その後安藤重博・岡信友次いで正徳元年(一七二二)に石川氏に代わつて伊勢国亀山(現三重県亀山市)から板倉勝澄が入城する。板倉氏はその後、勝武・勝從・勝政・勝政・勝政・勝政・勝政・勝政と七代続き廃藩置縣を迎える。

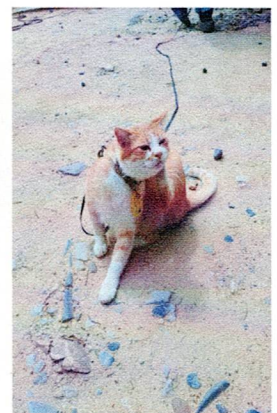
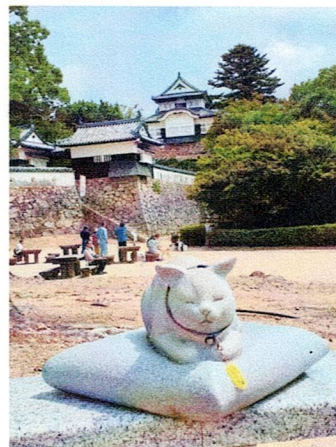
備中松山城の沿革

備中松山城は、延暦二年(一〇一四)に有漢(現上野郡有漢町)の地頭秋庭三郎重信が臥牛山の太松山に建てたことに始まる。元弘年中(一一三三～一一三六)には、秋庭氏に代わり備後の三好氏の一族である高橋九郎佐門が康が太松山に入城。この頃には備後には小松山まで拡張し、弟の太五郎を備前させている。その後、城の隣接する成羽郡吉田(現吉田郡成羽町)城主三村家親が尼子氏の加勢吉田左京亮を討ち、備中松山城主となつていく。元龜三年(一五七二)、將軍足利義昭の仲介で毛利氏と宇喜多氏の和睦が成立すると、三村元親は東方の備田備長と結び、毛利氏に反旗を翻す。天正二年(一五七四)冬から翌三年夏にかけて毛利・宇喜多連合軍と三村勢との間で備中松山城をはじめとする備中諸城をめぐる備中陣戦が展開される。いわゆる「備中兵乱」で三村氏は敗北が、この頃には備中松山城の本城は小松山へ移り、臥牛山一帯は太松山をはじめ天神丸・佐内丸・本太丸・馬鈴丸などが出城・出丸が設けられ、全山が一大要塞となつていく。この頃、また居館である御帳小堀も現在の場所(臥牛山南西麓、現高松高等学

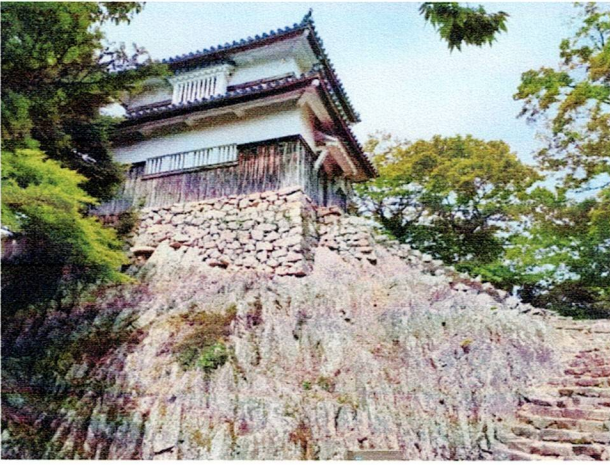
以上の3枚の画像が頂いたパンフレットから引用



←松山城天守は国内で山城に残っている唯一の天守
天和3年(1683)から残っているとされている。
二層二階の層塔型で、本来は八の平櫓からなる連結の天守です。一階には、天守では珍しい囲炉裏がきつてあり、籠城時の城主の居室である装束の間が設けられている。二階には、御社壇と呼ばれている神棚が祀ってある、



↑城主、さんじゅーろー (管理人の猫)



←二層櫓（重要文化財）

天守と同様に現存する建物であり、備中松山城での唯一の二階建ての櫓です、天然の岩盤の上に石垣を築き、二重櫓が建築されている。出入り口が二箇所設けられており、有事の際には天守から裏側へ逃げるためのものであった可能性もあり。



←大手門脇の岩盤と石垣

天然の巨岩を石垣の一部にうまく取り込んだもので、備中松山城の最大の特徴です。備中松山城が築かれた臥牛山は、花崗岩質の山であり、花崗岩を上手に残し、石垣の一部として築城されている。岩盤は、天守や二重櫓の基礎にも見ることができる。



←本丸

天守や二重櫓がある曲輪です。かつては天守と二重櫓のみが残っていましたが、平成9年(1997)には、重要文化財を中心に、本丸の正面玄関ともいえる本丸南御殿をはじめ、五の櫓、六の平櫓、南・東御門、土塀などを史実にもとづいて復元し、往來の姿を想像することができるようになっている。

←本丸

現存天守 12 城の登城記念の旅ですが、過去に、下の 11 城を訪問見学して、弘前城（青森県）松本城（長野県）丸岡城（福井県）犬山城（愛知県）彦根城（滋賀県）姫路城（兵庫県）備中松山城（岡山県）丸亀城（香川県）伊予松山城（愛媛県）宇和島城（愛媛県）高知城（高知県）、残りは松江城（島根県）になる。現在 11 月に訪問予定です。

5 鬼ノ城 (古代山城 7世紀後半に築城された軍事施設)

注 パンフレットから引用

鬼城山 (きのじょうざん)

岡山県総社市の北東部に位置する鬼城山（標高約400m）は吉備高原の南縁にあたり、古代吉備の中心地であった総社平野や足守川流域の全貌を眼下に望み、遠くは瀬戸内海や四国の山々も手に取るように見渡すことが出来る眺望絶景の地です。

山の山頂部（8合目から9合目）には、古代山城の鬼ノ城跡があり国指定史跡として、その壮大な遺構は多くの人々を惹きつける歴史ロマン漂うスポットとなっています。

また鬼城山は吉備史跡県立自然公園の特別地域として、自然環境においても優れた景観のみならず、豊かな動植物相を併せ持ち、吉備高原と瀬戸内平野が接する貴重な生態系を有する一角です。

鬼城山は、豊かな自然・貴重な歴史遺産・素晴らしい眺望の三要素が相乗効果を生み、多くの来訪者を魅了しています。

鬼ノ城 (きのじょう)

鬼ノ城はその名が古代の歴史書には登場しない謎の古代山城です。

古代山城は7世紀後半に築城された軍事施設です。百済復興を支援する倭（日本）は白村江の戦いにおいて唐・新羅の連合軍に敗れます。敗戦に伴う侵攻を恐れた中央政権は対外防衛施設として西日本各地に城を造らせました。鬼ノ城はその内のひとつであるといわれています。

現在は西門を始めとした遺構が復元整備され、当時の威容を今に伝えています。

鬼ノ城の概要

城壁は、鬼城山の8合目から9合目にかけて鉢巻き状に築かれていて、幅約7m、高さ約6mでその総延長は約2.8kmに及びます。

城内面積は約29haに及ぶ広大なもので、東西南北4か所の城門と、6か所の水門が存在し、城内の中央付近には礎石建物跡が7棟確認されています。

鬼ノ城は、数度にわたる発掘調査の成果により7世紀に築かれ8世紀まで存続したと考えられています。

桃太郎伝説の舞台～日本遺産～

鬼城山は、伝説の中で温羅と呼ばれた鬼が住んでいたとされる山です。そのことから、日本遺産「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやまの構成要素となっています。

鬼ノ城の地名の由来

鬼ノ城は、古代の正規の歴史書には登場しないが、後世の文献である鬼ノ城縁起などにでてくる。それによると「異国の鬼神が吉備国にやって来た。彼は百済の王子で名を温羅（うら）という。彼はやがて備中国の新山（にいやま）に居城を構え、しばしば西国から都へ送る物資を奪ったり、婦女子を掠奪したので、人々は恐れおののいて「鬼ノ城」と呼び、都へ行つてその暴状を訴えた・・・」。これが、一般に温羅伝承と呼ばれる説話で、地名もこれに由来している。

鬼ノ城の構造と規模

鬼ノ城は、すり鉢を伏せたような形の山で、斜面は急峻だが頂部は平坦である。この山の八合目から九合目にかけて、城壁が2.8kmにわたって鉢巻状に巡っている。

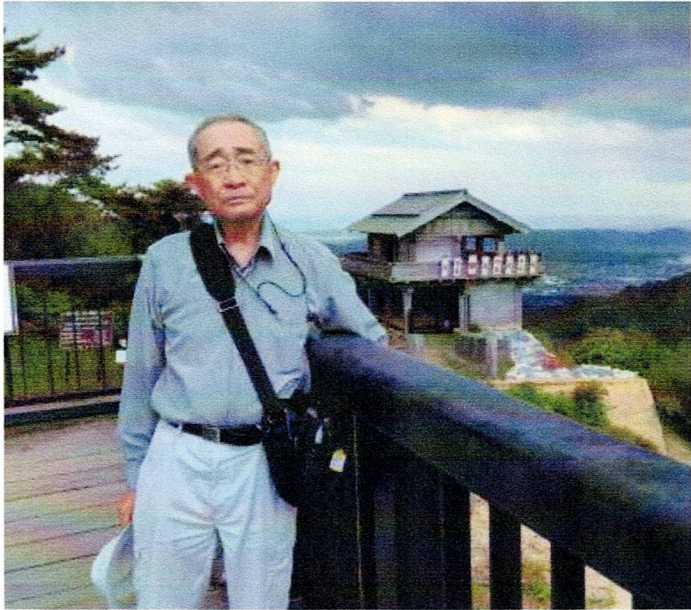
城壁は、一段一列に並べ置いた列石の上に、土を少しづつ入れてつき固めた版築土塁で、平均幅約7m、推定高は約6mもある。要所には堅固な高い石垣を築いており、その威圧感天然要害の地であることとあわせ、圧倒的な迫力をもっている。このように、版築土塁や高い石垣で築かれた城壁は、数m～数十mの直線を単位とし、地形に応じて城内外へ「折れ」てい

ることに特徴がある。

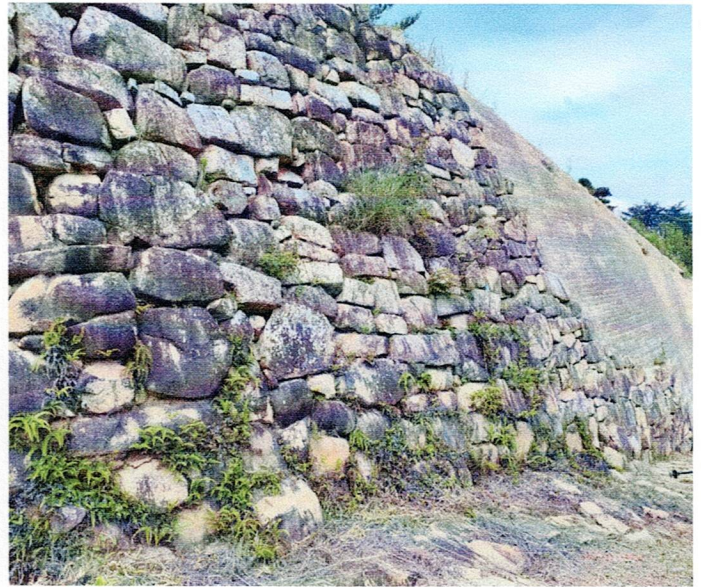
城壁で囲まれた城内は比較的平坦で約30ヘクタールという広大なもので、4つの谷を含んでいるため、谷部には排水の必要から水門が6ヶ所に設けられており、また、出入り口となる城門が4ヶ所にある。城内には、食品貯蔵庫と考えられる礎石建物跡やのろし場、溜井（水汲み場）もある。

この他に城内には貯水池とみられる湿地が数ヶ所ある。さらに兵舎、各種の作業場なども予測されるが未発見である。

以上、総社市公式観光 WEB サイトから引用



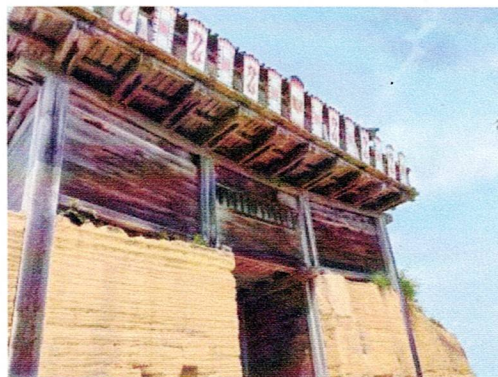
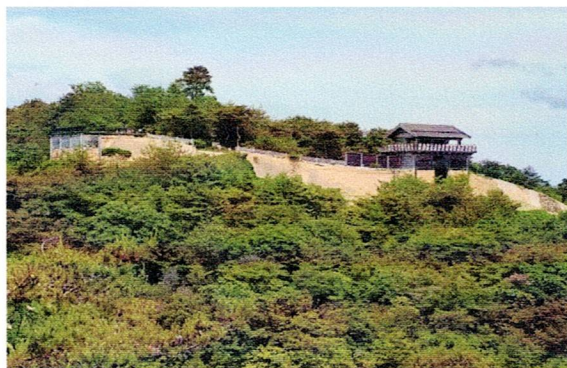
↑ 角楼からの西門



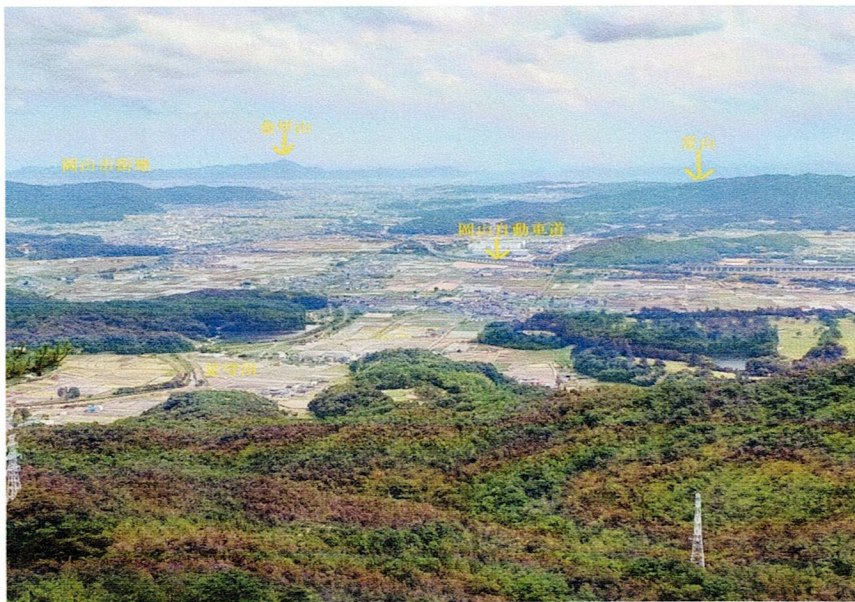
↑ この積み方は、野面積みでなく、朝鮮積み
←推定復元（西門）



↓展望デッキからの西門



←西門の入り口



← 屏風折れ（高石垣）からの眺望
遠くに、岡山県の児島半島の最高峰
金甲山が見える、

感想 古代山城の鬼ノ城は7世紀後半に百済の人を使つての築城だそうです。土塁がほとんどで、石垣は、1割程だそうです。
古代山城は、初めてで新鮮であった。

今回のツアーの登城記念印です。



参考に 津山城の登城記念 デザインは2種類”



津山城を築城した初代藩主、森家の家紋「鶴丸」が入ったものと、森家断絶後に津山藩主となった松平家の家紋「三つ葉葵」、両家紋が入った2種類があり、どちらも中央に大きく「津山城」の文字が書かれています。鶴山城本丸にある備中櫓で販売されており、どちらも1枚300円で購入することができます。

JALのロゴマークと同じです。
(説明されたが、記憶できず)

最後に、現存天守12城の登城の中で一番の難関であり、標高430mの臥牛山にある備中松山城は、途中までマイクロバスで行くも杖を付きながら登り切った。人生で一番の登城体験でした。